

ベートーヴェンの青春

09.07.2023 金古 尚

ベートーヴェン(1770—1827)の音楽というと重厚で構造が堅固で、有無を言わさない説得力を持つというイメージがあるけれども、ベートーヴェンにも若々しく、明るく、瑞々しい感性に溢れた音楽を描いた時代があった。そんな青年ベートーヴェンの音楽を改めて聴いてみたいと思う。

ピアノ・ソナタ第3番ハ長調 Op.2-3 第2楽章	7'01
ウィルヘルム・ケンプ DGG431 198-2	Aufnahme 1964.11

作品2の3つのピアノ・ソナタは1793年から95年にかけて作曲されている。全体に自由に伸びやかな明るさを持つ作品。ここで聴く第2楽章は変奏曲で構成される。詩的な味わいを持ち、伸び伸びとした心情が聞ける。初々しい魅力に溢れる作品。

ピアノ協奏曲第1番ハ長調 Op.15 第3楽章	10'18
ルドルフ・ゼルキン 小澤征爾 ポストン交響楽団	
TELARC CD80061 1983.10.5	ポストン・シンフォニーホール

1794年から95年にかけて書かれた。第1番とあるが、作曲されたのは第2番より跡だったが、第2番の補筆などあって出版がこちらの方が早くなり第1番として知られることとなる。第3楽章はベートーヴェンらしいスケールの大きさと激しさを感じさせる。初演はベートーヴェン自身のピアノでプラハで行われている。

弦楽四重奏曲第6番変ロ長調 Op.18-6 第4楽章	8'29
アルバン・ベルク弦楽四重奏団 EMI 5.73606.2	1980.6

Op.18は6曲の弦楽四重奏曲から成る。1798年から1800年にかけて作曲された。番号順の作曲ではなかったようだ。第6番は5番目に書かれたものと言われている。この6曲にはそれぞれはっきりした個性を持ち、若いベートーヴェンがすでに大きな音楽的な許容範囲を持つことがわかる。第6番の第4楽章は「ラ・マリンコニア」の表題を持つアダージョの序奏があり、44楽章の長さを持つ。深い感情表現が見られるが、これが終わって明るい軽妙な響きと澁刺とした気分の対比が効果的である。

ヴァイオリン・ソナタ第5番ハ長調「春」 Op.24 第1楽章	10'13
ダヴィッド・オイストラフ レフ・オボーリン	
Phi 468 408-2 1962	パリ

1801年の作曲。流れるような爽やかな旋律から始まる。この「春」という名前はベートーヴェンがつけたものではなく、のちにつけられたニックネームである。これまでの4つの

ヴァイオリン・ソナタは3楽章で書かれていたが、ここでは4楽章制をとっている。

交響曲第2番二長調 Op.36 第4楽章 6'08

レナード・バーンスタイン ニューヨーク・フィルハーモニック

SONY 1964 ニューヨーク マンハッタン・センター

この作品は1801年に作曲が始められ、翌年の秋、ハイリゲンシュタット滞在中、あるいはウィーンへ帰った直後に完成されている。「若々しく瑞々しい作品群」と書いてきたが、この辺りからベートーヴェンの過酷な運命が始まっていた。耳の病の兆候である。このことを友人の手紙に書いたのが、1801年のこと。1802年から彼はハイリゲンシュタットで静かな自然の中で耳を労っていたのだった。しかし病状は好転せず、「ハイリゲンシュタットの遺書」を記す。1802年10月6日の日付がある。ただ、この遺書は単純に絶望に終わっていない。「自らに課せられた創造を全て成し遂げるまでは、この世を捨て去ることはできない」彼は、絶望と訣別し、新たな一步を踏み出すこととなる。この第2交響曲の若々しさと明るさはそんな彼の心のうちを物語るものとなる。